Sagrada Familia －聖家族－
サグラダ ファミリア
２０２５年９月７日号
発行：カトリック水戸教会 広報部

【典礼部だより】９月の典礼暦から～十字架称賛の祝日～

2025年９月の典礼暦を見ると、７日が年間第23主日、21日が年間第25主日となっているのに、その間の14日は「年間第24主日」となっていないことに気づかれるはずです。

今年は９月14日・十字架称賛の祝日がちょうど日曜日に当たるためですね。

イエス様の十字架――人々の救いと勝利の希望――を思い起こし、讃えるこの祝日は、1700年ほど前、キリストの墓の上に建てられた聖墳墓教会の献堂式に関連して定められたと言われています。５世紀のエルサレムで聖墳墓教会献堂の日の翌日に十字架を礼拝する習慣が確立、それが７世紀になってカトリックの典礼に取り入れられました。

この日の第一朗読では「民数記」の21章４節後半から９節が読まれます。長い長い荒れ野の旅に耐えかねた民が神様に逆らう場面です。神様は『炎の蛇を民に向かって送られ』、この蛇に噛まれて多くの死者がでました。

民は悔い改め『わたしたちは主とあなたを非難して、罪を犯しました。主に祈って、わたしたちから蛇を取り除いてください。』とモーセにとりなしを願います。このことばは、わたしたちがミサの最初に唱える「回心の祈り」ととてもよく似ています。

モーセは民をとりなし、神様から言われたとおりに「青銅の蛇」をつくって旗竿の先に高く掲げ、それを見た民は災いから救われました。この「高く掲げられたもの」「それを見た民が救われる」というイメージは、福音朗読の「ヨハネによる福音」３章13節から17節でキリストの十字架とつながっていきます。

第二朗読は「使徒パウロのフィリピの教会への手紙」の２章６節から11節です。朗読を聞いて「聞いたことがあるなあ」と思われる方も多いでしょう。

この有名なキリスト賛歌は、訳は多少異なりますが、典礼聖歌集にも317番「キリストは人間の姿で」として収められています。復活祭前の「枝の主日（受難の主日）」のミサ、そして「聖金曜日・主の受難」の祭儀で詠唱として必ず歌われる聖歌ですね。

十字架は、イエス様がわたしたちのために人となり、わたしたちの罪のために死をその身に受け、わたしたちを救うために復活され、神のゆるしをもたらされたことを表し、いつも高く掲げられている尊い木です。

十字架称賛の祝日は『その葉、その花、その実り』（典礼聖歌集336「十字架賛歌(2)〔クルクス・フィデーリス〕」）をあらためて思い起こし、讃える絶好の機会だと思います。

典礼部／〇〇〇〇　監修：ルスニ神父・シスター今田

【葬儀部からのお知らせ】～いざという時の備えについて①～

葬儀の初動対応　まず教会（029-221-3976）へ第一報を！

（または、ルスニ神父／070-2793-9702 に連絡）

水戸教会葬儀部では、これまでも葬儀についての「説明会」や「旅立ちの準備ノート」の作成・配布等の呼びかけを行って参りましたが、「いざという時」は不意に訪れるものです。

そんな時のために「サグラダ・ファミリア」にも基本情報を掲載するとともに、皆様からのご意見やご質問にもお答えしていきたいと思います。

初回の今回は「霊的な備え」について。

１．病者の塗油（とゆ）の秘跡（病者の聖油）

重い病や臨終に際しては、できるだけ早く主任司祭や教会に連絡し、病者の塗油を受けられるようにします。

この秘跡は病を癒（いや）す恵みだけでなく、死に向かう旅路を平安のうちに歩むための大きな助けになります。

２．ゆるしの秘跡（告解）・聖体拝領

可能であれば告解をし、主の赦しを受けてから聖体をいただくことが望ましいです。

最期にいただく聖体は「旅路の糧（かて）（ヴィアティクム）」と呼ばれ、天の国への道を支えてくれます。

３．祈りの同伴

家族が共に祈り、「主の祈り」「アヴェ・マリアの祈り」「元后（げんこう）あわれみの母」などを唱えましょう。病者に意識がなくても、祈りや聖歌は心に深く届きます。

――次回は「逝去の際の流れ」について
　お知らせいたします。

※葬儀についてのご質問は、葬儀部長：〇〇〇〇、葬儀副部長：〇〇〇〇、〇〇〇〇
または水戸教会広報部までお寄せください。
お待ちしております。

とおきくにや

遠き国や海の果て　いずこにすむ民も見よ
慰めもて変わらざる　主の十字架は輝けり
※折り返し
慰めもて汝がために　慰めもて我がために
揺れ動く地に立ちて　なお十字架は輝けり

水は溢れ火は燃えて　死は手広げ待つ間にも
慰めもて変わらざる　主の十字架は輝けり
※折り返し

仰ぎ見ればなど恐れん　憂いあらず罪も消ゆ
慰めもて変わらざる　主の十字架は輝けり
※折り返し

【十字架称賛の祝日と9月1日に寄せて】

この聖歌は、1923（大正12）年9月1日に発生した関東大震災の際、英語講師として来日していた宣教師J. V. Martin師によってつくられました。避難所を訪れた彼の眼には、蚊帳の中で灯されたロウソクの光が「闇を照らす十字架」に見えたのだといいます。